



2025年 碑前祭



2025年 墓碑法要



第12回「鶴彬」かほく市民川柳祭 受賞式



高松少年少女合唱団とはまなすコーラスの皆さん



冬のトさんの講演



でえげっさあのコンサート

通信 鶴彬

はばたき

「鶴彬を顕彰する会」



第50号

2025年11月20日

鶴彬を顕彰する会

もくじ

- | | |
|-------|-------------------------------|
| ② 3面 | 墓前法要、碑前祭 |
| ④ 5面 | フェスタ一日目（9月14日）第12回かほく市民川柳祭表彰式 |
| ⑦ 面 | フェスタ二日目（9月15日）でえげっさあのコンサート |
| ⑧ 17面 | 鶴彬川柳大賞30周年記念講演「鶴彬と大阪を歩けば」冬のト氏 |
| ⑬ 20面 | 鶴彬・交流の広場 |
| ⑮ 23面 | 渡辺寛さんを追悼するコーナー |
| ⑳ 24面 | 会費・購読費納入のお願い 編集後記 |

今年はまだかど交流館で折鶴教室を開き、多くの方々に御参加頂いて、皆さんと共に平和と能登復興への祈りを込めて千羽鶴を折り、フェスタ会場に展示した。

① 第8回墓碑法要の集い

9月14日（鶴彬の命日）午前10時に浄専寺本堂にて読経。全員が焼香を行った。そのあと平野住職の感話。

② 第27回鶴彬をたたえる集い「碑前祭」

墓碑法要後、会場を高松歴史公園に移し、午前11時より碑前祭を執り行った。

③ 第12回「鶴彬」かほく市民川柳祭

14日午後2時より、高松少年少女合唱団とはまなすコーラスの合唱。そのあと、高松産業文化センター大ホールで、小学生の部・中学生の部・一般の部の授賞式。会場には、かほく市民川柳祭の入選作品パネルと鶴彬川柳大賞の入選作品のパネルも展示した。

④ 「鶴彬川柳大賞」応募30周年記念講演

15日午後2時より、「でえげっさあ」コンサート。そのあと、あかつき川柳会会長の冬のトさんより「鶴彬と大阪を歩けば」という題で講演していただいた。

第13回。鶴彬のふる里。 高松歴史街道フェスティバル

※2025年9月14日(日)は、2つの事業
(墓碑法要と碑前祭)を実施しました。

■第8回 鶴彬墓碑法要の集い

午前10時から浄専寺本堂で、平野喜之住職の読経に続き、参列者約20名全員が焼香し鶴彬を偲びました。毎年、浄専寺境内にある墓碑の前で法要をするのですが、法要開始直前まで雨が降っていたため、本堂で法要を勤めることになりました。読経後、住職より感話がありました。



浄専寺本堂で感話をする平野喜之住職

感話(平野喜之住職)

高松出身の鶴彬(喜多一二^{かつじ} 一九〇九(一九三八)の墓碑建立式典と納骨法会は、命日に当たる二〇一八年九月十四日にこの墓碑の前で行われました。

鶴彬が亡くなった後、その遺骨は当時岩手県盛岡市に住んでいた兄のもとに引き取られました。盛岡の親族が高齢化する中、「鶴彬を顕彰する会」が鶴彬の没後80年を記念して、鶴彬の出生地である高松でも墓参できるようにと、親族に分骨を願いました。親族で同会の幹事であり現在は事務局でもある喜多義教氏、城戸寿子氏(高松在住)らが、二〇一八年七月に盛岡に向き、分骨が実現しました。

今から7年前、岩手県盛岡市の浄土真宗のお寺である光照寺から、鶴彬の遺骨の一部がこの浄専寺の境内に移され、御命日に鶴彬墓前法会が勤められました。今年はその法会の第8回目になるわけです。光照寺でも、毎年、「鶴彬を語る盛岡の会」によって、九月十四日には墓前祭が行われているということです。

最近是我们たち顕彰会の活動とはまったく別のところで、鶴彬が取り上げられることが多くなりました。8月20日には、朝日新聞の朝刊で鶴彬のことが取り上げられていました。また8月24日には、滋賀県の安孫子^{あびこ}というところで、「鶴彬 こころの軌跡」が上映され、そのあと神山監督の講演がありました。また、

県外からまちかど交流館3階の鶴彬資料室を訪れる方たちが途絶えません。9月9日には、北海道や埼玉から16人の方々が来られ、5本以上のDVDを購入していかれました。

安孫子での神山監督のお話はなぜ戦争が終わらないのかという話を中心でした。「鶴彬 こころの軌跡」の映画の中で、憲兵と鶴彬の激しいやりとりの中で「警察は資本家の手先」という言葉が出てきます。鶴彬は今から100年前に戦争で武器を作ることによってお金儲けをたくらむ人たちの存在を見抜いていたのです。そのことを神山監督はお話しておられました。そしてそれは現代の日本でも行われていると指摘されました。

先程少し紹介しました8月20日の朝日新聞のコラムでは、鶴彬の次の川柳が取り上げられていました。

大砲をくわえ肥った資本主義

そして、次のような解説がありました。

戦争が巨大なビジネスとして、他人の血と他人の不幸で利を得る真実を、この1行は射抜いています。まさに寸鉄です。

そしてさらに、朝日新聞には、鶴彬の先生である井上剣花坊とその妻信子の娘である大石鶴子の川柳も掲載してありました。

算盤をはじき平和を出し惜しみ

そして、この川柳に次の解説がついていました。

時は流れても、政治家や戦争利得者の思惑と損得づくで戦火が止まない現実があるのは、いま私たちが知る通りです。

私たちは軍産複合体、つまり軍需産業と政府機関の結びつきについて、そういう国として、戦争中だけでなく、戦後80年たった現在でも日本という国はあり続けることをしっかり認識しなくてはなりません。

「鶴彬 こころの軌跡」の最後に、鶴彬の役をしている俳優さんが鶴彬の次の詩を読み上げます。

ああ良心よ、良心よ
われわれは愛しいお前のために
叛逆者の十字架を背負う

ここ近年は、9月14日でもまだ真夏のように暑いです。私たちはこの鶴彬の命日には良心の自由さえ保障されていなかった鶴彬が、叛逆者の十字架を背負いながら良心のままに生きた燃えるような熱い生涯に想いを馳せたいと思います。

■ 碑前祭

「第27回鶴彬をたたえる集い」

墓碑法要後、会場を高松歴史公園に移し、午前11時より碑前祭を執り行なった。約20名の方々が集まった。

たかまつまちかど交流館で皆さんの御協力を得て折った千羽鶴を会場に飾った。

司会進行は幹事の高橋成典さん。まず板坂洋介副会長より挨拶があり、次に親族を代表して甥の喜多義教さんが挨拶、続いてかほく市油野和一郎市長からのメッセージが幹事の遠田勝良さんより代読された。



竹田求さんによる献吟

集いには盛岡と大阪の仲間からも連帯のメッセージが寄せられた。

メッセージの披露に続き、「第30回鶴彬川柳大賞」の発表がなされた。投句人数は261名、当句数は519句でした。その中から川柳大賞1句、優秀賞3句を幹事の遠田勝良（亀公子）さんが読み上げた。

最後に石碑に刻まれた「枯れ芝よ 団結をして春を待つ」を高松吟詠会の竹田求さんが献吟し、参加者全員の献花と写真撮影があつて碑前祭を終了した。



高松歴史公園「枯れ芝よ 団結をして 春を待つ」の句碑前にて

第12回かほく市民川柳祭

9月14日(日) 15日(月・祝)

小学生の部、中学生の部、一般の部の入選作品パネルを展示し、これに鶴彬川柳大賞の入選作品パネルも加えた。道路や会場周辺には旗を立てた。

今年の市民川柳の応募結果は、小学生515名、中学生316名、一般17名だった。表彰式(9月14日)にはご家族の皆さんも来られて、多くの参加者で賑わった。

今年は授賞式の前に「高松少年少女合唱団」と「はまなすコーラス」の合唱があり、会場が大いに盛り上がった。



はまなすコーラス

第12回「鶴彬」かほく市民川柳祭成績

小学生の部／課題「喜」

*出句者1515名 選句 高松川柳会

【優秀句】

ありがとうと言ってくれてありがとう

香林 瑛斗(高松 5年)

【秀句】

夢叶い喜ぶ顔大空へ

宮崎あいな(宇ノ気 6年)

お母さん喜怒哀楽が激しいよ

竹中 煌幸(宇ノ気 6年)

あいさつし相手も返す喜びも

岩崎 大河(外日角 5年)



高松少年少女合唱団

【佳作句】

喜びは戦争せずに生きること

田辺 晴翔(大海 6年)

食べることにコメ1つぶもプレゼント

浅野 颯斗(七塚 6年)

つゆの日の笑顔のさきににじがある

雁行いおり(外日角 5年)

「喜んでるよ」言えないだけ反抗期

杉本つむぎ(宇ノ気 6年)

喜びはかぞくいっしょあたたかい

南 柚乃(高松 6年)

【入選句】以下、28句省略



小学生の部 受賞者



中学生の部 受賞者

中学生の部／課題「喜」

※出句者1316名 選句・七塚川柳会

【優秀句】

祖父は喜寿なんやなんやと目尻下げ

安達 可歩（宇ノ気 3年）

【秀句】

戦争は喜びを消す悪者だ

寺内 悠夏（高松 2年）

政治家の口先だけでは喜べぬ

直江 楓我（宇ノ気 2年）

物価高安くなれなれ特に米

根布長朋迦（宇ノ気 2年）

【佳作句】

あいさつはみんな喜ぶおまじない

二口 楓寧（高松 1年）

喜びは報われてからついてくる

沖野 心輔（高松 1年）

成績で一喜一憂うちの母

岸本 隆平（宇ノ気 2年）

人生は喜びだけで続かない

藤本 楓生（高松 3年）

喜ぶな戦いはまだ終わらない

坂本 陽舵（宇ノ気 3年）

【入選句】 以下、28句省略

一般の部／課題「悲」

※出句者17名 選句・鶴彬を顕彰する会

【優秀句】

悲しみも怒りも届かぬ参院選

桜井 晴美（高松）

【秀句】

あちこちの戦火を視てる北斗星

竹中つる子（高松）

悲しいね今朝も並んで古古古米

平野 道雄（高松）

逃げ場なし悲痛な叫びガザの日々

喜多 義教（高松）

【佳作句】

悲しみも時が薄めて行く人生

番定喜見三（浜北）

何時終わるガザの子達が泣き叫ぶ

井口るり子（木津）

兵帰る白木の箱で長い列

井口 武久（木津）

せまりくる老々介護先見えぬ

金治 信子（浜北）

地獄絵図能登の悲惨事手合わす

玄海 秀幸（高松）

【入選句】 以下、20句省略



一般の部 受賞者

フェスタ初日 (9月14日)

今年は戦後80年、鶴彬川柳大賞応募30周年の節目の年であるので、フェスタのテーマを「平和への願いを込めて」として出発しました。その活動の中心として、折り鶴Ⅱ千羽鶴をみんなで作ることにしました。たかまつまちかど交流館で折鶴教室を開き、みんなと千羽鶴を作っている中で、もう一つのテーマが生まれました。それは能登の復興です。平和への願いと復興への祈りを込めて、みんなと鶴を折りました。



フェスタ会場大ホールの入り口付近 鶴彬のパネルと行灯の展示



出来上がった千羽鶴に「がんばろう能登心は一つ」と書かれたメッセージカードを付けて輪島の集会場に持っていき、飾っていただきました。フェスタ会場である産業文化センター大ホールにも千羽鶴を飾り、来場者に観ていただきました。

会場には、小学生の部、中学生の部、一般の部の入選作品パネルと鶴彬川柳大賞の入選作品パネルを展示しました。多くの方々が自分の、あるいは自分の子供の作品だけでなく、友人や知人の作品を見つけて喜びの声を



フェスタ2日目 舞台では でえげっさあ が演奏

挙げておられましたので、パネルを展示した甲斐がありました。

午後二時になると、事情があつてフェスタ会場に来られない金田平夫会長に代わって平野道雄幹事が挨拶しました。そして、今年は「高松少年少女合唱団」と「はまなすコーラス」の合唱がありました。

その後、受賞者の名前が司会者の藤田スミ子さんに次々に読み上げられ、受賞者は壇上に用意された椅子に座りました。そして、平野道雄会長代理から賞状と記念品が受賞者一人一人に手渡されました。

フェスタ2日目 (9月15日)

この日の司会は、平野喜之事務局長でした。まず司会者の平野喜之さんから、白山市のフォークグループ「でえげっさあ」の簡単な紹介がありました。そして、コンサートが始まりました。

「でえげっさあ」には、社会問題を題材にした真面目な曲があるかと思えば、おじいさんのおならを題材にしたユニークな曲があったりもして、コンサートはとても楽しく親しみやすく、勉強にもなります。



リーダーは川崎正美さんで、演奏と演奏の間の川崎さんのトークも素敵でした。男の子になりたい女の子の絵本も歌にされました。40分の予定が一時間に延長されましたが、全然長く感じませんでした。

14日のコーラス、15日のコンサートがともよかったという声が、参加者やスタッフからも聞こえてきました。もちろん、授賞式や講演がメインであるには違いありませんが、音楽がこんなに会場のみなさんの心を豊かにして、いい雰囲気を作ってくれるものかと、



音楽の凄さを感じました。

14日も15日も会場の後ろのほうに、折り鶴を折るコーナーが設けられていました。会場に飾られている折り鶴を眺めていただくだけでも嬉しいのですが、自分で折ってみることも有意義なのではないか、ということでもこのコーナーを設けました。15日には大阪から来られたあかつき川柳会の方々が熱心に折り鶴を折ってくださいました。

「でえげっさあ」のコンサートの後、少し休憩を挟んで、あかつき川柳会会長の冬のトさんの講演が始まりました。



鶴彬川柳大賞応募30周年記念講演
「鶴彬と大阪を歩けば」

冬のト氏

[1] ご挨拶

本日はご来場下さり、本当にありがとうございます。

この度、講演させて頂くことになりました、冬のトといいます。大阪のあかつき川柳会の所属で、今年から会長をさせて頂いております。



今回、「鶴彬と大阪を歩けば」という題でお話しますが、これはあかつき川柳会が毎月発行している会報誌の2022年7月から1年間連載されたもので、僕が企画執筆しました。鶴彬を顕彰する会の方がその記事を読まれて評価して下さいことから、本日の講演の依頼がありまして、今日こうして登壇させて頂いております。

よろしく願います。

「鶴彬と大阪を歩けば」の企画の趣旨ですが、鶴彬の川柳の詠み替えをして普遍性を確認してみよう、というものでした。大阪各地の大正から現代にかけてのその地域特有の出来事を掘り起こして、それに類似する鶴彬の川柳を一句添えるという詠み替えの企画です。もとの鶴彬自身の発想を越えて、川柳の一作品として解釈の翼を拡げて愉しむ、というのを試みました。

[2] 鶴彬のプロフィール

ご存知の方もいるでしょうが、簡単に鶴彬の紹介をしたいと思います。

1909年明治42年1月1日に当時は河北郡高松町のこの地で生まれました。本名は喜多一二(かつじ)です。お父さんは喜多松太郎さん、お母さんはスズさんでした。家業は竹細工業ですが、養蚕業もしていました。2軒隣に貸本屋さんがあったので、そこで幼少

時からいろいろな書物を読んでいて、その貸本屋の主人から川柳を学びました。9歳の頃に父親が死去しました。その結果、母親は再婚して娘一人を連れて東京に移住したので生き別れとなりました。鶴彬を含めて残された子供たちは伯父の養子になりました。川柳については、現在で言う中学生の年齢から頭角を現して、15歳で河北新聞に川柳を発表して、川柳作家のデビューを果たしました。その時のペンネームは、読みは喜多一児ですが、かつじは漢数字の一と児童の児と書いて一児としました。1935年昭和10年の26歳の頃に鶴彬のペンネームを名乗ります。1938年昭和13年の2回目の獄中時代に赤痢に感染し、病院で死去します。享年29歳でした。

[3] 鶴彬との共通体験

鶴彬について研究された方は少なくありません。それぞれ考察を深めた評論を発表されています。そうした方々から見ると今回の自分の企画は考察が深くはないと指摘されるかもしれません。

そのような僕が、今回の講演をするに至った背景には、鶴彬と共通の体験をした者だという事情があります。鶴彬は治安維持法により無実の罪で獄中に拘禁された冤罪体験者でした。共産党員でなかったため、そもそも治安維持法の対象ではありませんでした。

僕も無実の罪で獄中に約20年に拘禁された冤罪体験者です。ただ、冤罪体験者と言っても大きな違いがあります。鶴彬は、2回目の獄中で病気になった結果、自由を取り戻すことができずに無念にも死去されました。その一方で僕は、再審無罪となつて自由を取り戻すことができました。

[4] 鶴彬の冤罪体験

簡単に鶴彬の冤罪体験を説明しますと、1回目は、金沢第七連隊時代に在営中に実刑1年8ヶ月の判決を受けて1931年昭和6年4月に大阪衛戍監獄に収監されました。刑期満了後の1933年昭和8年に除隊して自由となります。2回目は、1937年昭和12年12月3日に特別高等警察に検挙されて東京都中野区野方署に拘留されました。その留置場で赤痢にかかり、1938年昭和13年9月14日に豊多摩病院で29歳で死去しました。

[5] 冬のトの冤罪体験

僕の冤罪体験を説明しますと、29歳の1995年9月10日に無実の罪で逮捕されて警察署に拘留され、取調べで嘘の自白をしました。その後、10月20日に大阪拘置所に移管されました。そして裁判が始まり、一貫して無実を訴えます。けれども、大阪地裁では1999年3月に無期懲役判決となりまし

た。大阪高裁では2004年12月に控訴棄却になりました。最高裁では2006年11月に上告が棄却されて、無期懲役判決が確定しました。翌年の2005年6月に大分刑務所に移送されました。大阪拘置所から大分刑務所への移動は新幹線でした。手錠腰縄付きで手錠にはカバーが付いていましたが、現代版の市中引き廻しの刑といった風体での移送となりました。その後、2009年7月に大阪地裁に再審請求をします。2012年3月に大阪地裁が再審開始決定と執行停止決定を出しました。ところが、大阪高裁が執行停止決定だけを取り消したので、釈放がキャンセルになりました。その後、2015年10月に大阪高裁が検察の即時抗告を棄却して再審開始決定を支持し、2度目となる執行停止決定を出しました。その結果、2015年10月26日についに釈放されて、7352日振りに自由を取り戻しました。このとき49歳でした。釈放後の2016年4月に大阪地裁で再審裁判が始まり、8月10日に再審無罪判決が出されて、即日確定しました。

鶴彬が命を落としたのは29歳の9月でした。僕は、それと同じ歳月の29歳の9月の時に無実の罪で逮捕されました。どこか運命的な巡り合わせだと思わずにはいられません。

[6] 冤罪の事情

残念ながら、冤罪だと説明してもなかなか

信じてもらえないのが、現実です。実際のところ、肌感覚としては、社会の人々の多くにはまだまだ信じてもらえてないのではないかと感じています。

ただ、一般的には無実だという話をなかなか信じられない、ということも感覚的には理解できます。なぜなら、無実というのは犯罪の実態がない事柄だからです。人間は実態のない事柄を信じるのが難しい生き物です。だから、なかなかピンと来ないのだと思います。

犯罪の実体のない事柄というのは、当然のことなのですが、証明することが非常に難しいのです。証明するのが難しいので、多くの冤罪事件は泣き寝入りを強いられているのが、現実です。

無罪を証明できなければ政府や社会から「犯罪者」のレッテルを張られたまま生きていくよりありません。僕が再審無罪になったのは本当に奇跡的なことで、運よく犯罪の実体がない事柄を証明する証拠を発見できたからです。

鶴彬が冤罪だと証明するのは、戦前の古いことなので現実としては難しいのが正直なところです。それでも鶴彬が冤罪だと思うのは、鶴彬自身が全く私欲の無い人で、生涯を通じて『庶民の苦しみを救いたい』という信念をもって川柳を詠んでいた文芸人だからです。病院で無念にも死去されたので、無罪となったわけではありませんが、僕は個人的には、その信念において彼は冤罪だったと思っ

ています。

正直を申しますと、本日ここでお話するのを当初は悩みました。再審無罪判決後にネットでものすごく誹謗中傷を受けていたからです。ですから地域フェスティバルの場に登場して良いものかと悩みました。でも、鶴彬ならきつと勇気を出して登壇するだろうと思いますので、ここに立たせて頂いております。

実は、僕は、再審無罪後に帰化申請をして日本国籍を取得しています。前科がありますと帰化申請は却下されます。ですから、日本国籍の取得は、実質的に日本政府が公式に冤罪だと認めたことになります。通常は再審無罪になれば国家賠償の民事訴訟をしますが、僕の場合は帰化申請をしたので、民事訴訟をしませんでした。賠償金よりも日本政府による名誉回復の道を選びました。国家賠償の民事訴訟をしても国が公式に冤罪だと認める可能性は極めて低いのが現実です。でも、帰化申請であれば日本政府も公式に認めざるを得ません。ですから、一応のところは名誉回復を達成しています。それでもネットの影響力は絶大ですから、慎重に判断して登壇させて頂いております。

[7] 鶴彬との出会い

鶴彬との出会いは、大分刑務所から釈放される約3年前の2012年のことでした。

その年の春に激動の経験をしました。

2012年の3月7日に大阪地裁が再審開始決定を出しました。それに対して3月12日に検察が大阪高裁に即時抗告しました。その後、3月29日に大阪地裁が無期懲役刑の執行停止決定を出して、その釈放日時を4月2日午後1時と決定しました。それに対して検察は、執行停止決定の取消しを求めて大阪高裁に即時抗告しました。

執行停止決定を受けて、大分刑務所では着々と釈放準備を進めていました。あとは釈放命令書等待つだけの状態となり、僕は受付けで待機していました。ところが時間になっても釈放されません。どうなっているのかと思っていると、午後2時頃に看守から執行停止決定の取消し決定通知書が交付されました。大阪高裁が、その通知書を発行したのは、釈放1時間前の正午12時でした。執行停止決定を取り消したということは、大阪高裁の裁判長は、この時は、まだ、大阪地裁の再審開始決定を支持してはいない、ということを示唆していました。

このように釈放1時間前に釈放が取り消しになるという激動を体験しました。無期懲役刑の受刑をしている時に再審開始決定が確定する前に執行停止決定が出たのは戦後初めてのことでした。そのため、司法の対応が紆余曲折しました。それ以前のケースでは、受刑中に再審開始決定が出されても、その再審開始決定が確定した後に釈放されるという運用

でした。

ちなみに、袴田事件の袴田巖さんが再審開始決定と執行停止決定で東京拘置所から釈放されたのが2014年3月でした。これは僕の1度目の執行停止決定と取消決定の後のことで、その僕の前例を踏まえて出されたものだと言われています。

僕の釈放の取消しがあつた2012年の夏に支援者から鶴彬とあかつき川柳会を紹介されました。

支援者から紹介された鶴彬の句が有名な代表句『暁をいだいて闇にある蕾』でした。釈放取消後も大分刑務所で無期懲役刑を受刑していました。その時に、この句と出会いました。再審の闘いをしていると原則的に仮釈放の審査に通りません。例外的に稀に通るという状況です。そのような立場で無期懲役刑の受刑をするというのは果ての無い闇にいるような感覚です。執行停止決定を取り消した大阪高裁の裁判長は、この当時はまだ、大阪地裁の再審開始決定を否定的に考えていました。この時期は、再審の闘いに負けければ釈放の可能性は極めて低い、という立場に置かれていました。それだけに冤罪の体験者であつた鶴彬の川柳には、心が打たれるような感覚を覚えました。

鶴彬が獄中にいた当時は、戦前の監獄には

文房具の所有が認められていませんでした。そのために、彼が獄中で詠んだ川柳をリアルタイムで記録に残すことはできません。金沢第七連隊時代に在営中に詠んだ川柳は残っています。代表句の『暁をいだいて闇にゐる蕾』は、釈放後の1936年3月に発表されていますが、獄中のことを詠んだ川柳だったそうです。ただ、獄中でリアルタイムに記録した川柳は残っていません。

現在は獄中でも文房具を所有できるので記録ができます。僕は詠んだ川柳を記録することができました。今まさに無実で再審の闘いをしながら無期懲役の受刑をしているという冤罪の体験を記録として残しておきたい、というのが僕が川柳を詠むことにした理由です。獄中で詠んだ川柳の代表句は『無実でも拒めぬ獄の飴と鞭』で、リアルタイムで日記帳に記録した川柳です。

この頃は、まだ鶴彬と出会ったばかりなので、彼の生涯について詳しくはありませんでした。ただ冤罪体験者だからこそ、鶴彬の代表句の『暁をいだいて闇にゐる蕾』には時代を超えた普遍性があると共感しました。

[8] 始まりは不定期記事の掲載

今回の『鶴彬と大阪を歩けば』の企画の原点は、この頃に実感した鶴彬の川柳が持つ普遍性です。どのような普遍性があるのか、それを明らかにしたくて、その後、詠み替えの

企画を考えました。会報誌で連載されたのは2022年7月の第202号からですが、実は、それ以前の2020年〜2021年に不定期で4本の記事が速報欄に掲載されています。当初は1年間の連載企画までは考えていませんでした。けれども、不定期記事4本を企画して手応えを実感したので、その後の連載企画を決めました。結果的には2020年12月の第183号が初掲載となりました。

不定期の企画をするまでは、まだ鶴彬の生涯については殆ど知らなくて、代表句以外の川柳も殆ど知りませんでした。頼りにしたのは、最初に獄中で出会ったときの『鶴彬の川柳には普遍性がある』という手応えでした。鶴彬の川柳を一文芸作品として先入観をなくして詠み替えをするのに、その普遍性をベースにしました。

企画の進め方としては、まずは目的地の事前調査をした上で現地調査をして記事の原稿を作り、最後に鶴彬全集から類似の句を見つける、という手順です。調査の前に候補の句を決めることはしませんでした。必ず、調査後に原稿の最後で類似句を探すという方法にしました。そうでないと、本当の意味で普遍性を確認することにはならないからです。全ての記事で類似の句が見つかるのか、という心配がありました。まずは行動してみようと取り組みました。結果から申しますと不定期4本と連載12本の記事全てで類似句を添えることができました。不定期記事を始めた当

初は、類似の句が見つからなくて企画倒れにならないかという不安が多少なりともありました。そのため、数カ月ごとに不定期で記事を掲載していました。けれども不定期の記事を重ねるにつれて鶴彬の眼力を少しずつ実感させられていきました。不定期記事の4本目が掲載された頃には、鶴彬の視野の広さと眼力の凄さを実感し、1年間の連載企画でも類似の句が見つかるに違いない、と思えるようになりました。

そのような流れで『鶴彬と大阪を歩けば』の企画に着手することになりました。1年間の連載は手間のかかる事でしたが、とにかく最後まで楽しく取り組みました。原稿の最後になってから鶴彬全集で類似の句を見つけたびに感心し、それが次の記事に取り組みエネルギーになりました。

『鶴彬と大阪を歩けば』の記事については現在、鶴彬を顕彰する会の会報誌『はばたき』で順次掲載されていますので、ここでは印象深い記事について紹介したいと思いますが、まずは不定期記事の4本については時系列で振り返ってみたいと思います。

[9] 不定期記事の紹介

① 不定期記事第1回

不定期記事の最初の1回目は2020年12月の第183号のアスベスト公害に関する記

事で、鶴彬の句は『肺を病む女工故郷へ死に
来る』を添えました。

大阪府南部の泉州地域はタオルなどの紡績
業で有名ですが、石綿製造も盛んだった歴史
があります。その泉南市に『泉南石綿の碑』
があります。これは、アスベスト公害の犠牲
者を鎮魂し、その歴史を伝える慰霊の地で
す。アスベストは日本語で石綿と言いま
すが、もとは鉱物です。日本の石綿製造の歴史
は明治後半からですが、中小の製造業者が集
約していたのが泉南市の信達（しんだち）地
域で、そこに「泉南石綿の碑」が建てられま
した。

アスベスト公害を政府が公式に認めて謝罪
し補償を決めたのは近年になってからのこと
です。アスベストと健康被害の関連性が医学
的に証明されたのは戦後になってからでし
た。それまでは大量に製造使用されてきた歴
史があります。

アスベストは古代に発見されましたが、19
世紀後半には世界的に奇跡の鉱物として注目
されたので、以来大量に製造されるようにな
りました。

日本では明治後半から製造され始めます
が、最初に製造を始めたのが泉南地域の業者
でした。泉南地域は紡績で有名ですが、明治
後半になると衰退します。でも、石綿製造が
紡績技術の応用で可能だったことから、紡績
から石綿製造へと転換していききました。

鶴彬が生きた時代には、大量に石綿が製造

されていましたが、社会的に健康被害が認め
られていませんでした。健康被害について調
査していた医師はいましたが、発症するまで
の潜伏期間が15〜40年だったので、医学的な
調査が遅れました。ですから、鶴彬自身は、
石綿製造の健康被害については問題意識がな
かった可能性が高いと思われます。

とは言え、紡績業と石綿製造とに繋がりが
あると分かったので、紡績業の健康被害につ
いて詠んだ句を類似句として添えました。

鶴彬が女工の川柳を詠んでいたのは知って
いたので、最初の詠み替え企画のテーマとし
ては、企画倒れにはならないと事前に分かっ
ていました。

この石綿被害の記事については、『鶴彬と
大阪を歩けば』の9回目で再び掲載されま
す。再取材して分かった事情を加筆修正し
て、鶴彬の別の句を添えました。後ほど紹介
します。

② 不定期記事第2回

不定期記事の2回目は、2021年2月の
第185号の元紡績工場だった資料館の記事
で、鶴彬の句は『青春をかう紡績の募集員』
を添えました。

泉南市熊取町に元紡績工場だった煉瓦館が
あります。明治初期に建てられた煉瓦作りの
紡績工場を近代化の歴史遺産として当時のま
ま保存している資料館です。煉瓦作りの紡績

工場で有名なのは世界遺産になった富岡製糸
工場です。写真で見ても壮観な煉瓦造りの工
場ですが、それに匹敵しなくても、関西にも
紡績業の中心地であった泉州に煉瓦造りの工
場は残っていないかと調べると、泉南市熊取
町に煉瓦館があることが分かりました。正式
名称は「熊取交流センターすまいるズ煉瓦
館」です。泉州で残っている紡績業の煉瓦造
り工場は、この煉瓦館だけなので、貴重な歴
史遺産です。

泉州地域は綿産業の一大隆盛地で、日本の
タオル産業発祥の地です。明治中期から生産
が始まり、最盛期には住民の過半数の人々が
紡績関連の仕事をしていました。ですから、
全国からも女性が集まってきました。

貧しい農村地域の地方の住民からすれば、
紡績工場で働けば貴重な現金収入が得られま
す。当然、多くの女性が出稼ぎに出ていまし
た。鶴彬が生きた時代は、それなりに都会は
栄えていましたが、地方との格差が大きく
て、貧しい地方がたくさんありました。現代
とは違って労働環境を改善する意識が低かつ
た時代ですから、政府や会社は紡績工場の健
康被害を軽く考えて見過ごしました。

この記事の内容が詠み替えの企画にならな
いのは分かっていました。ただ、鶴彬は女工
の健康被害の川柳を詠んで注意喚起していま
した。その一方で貴重な現金収入だというこ
とも理解していたようで、あえて、それが分
かる句を添えました。

③ 不定期記事第3回

不定期記事の3回目は、2021年3月の第186号の滝畑ダムの記事で、鶴彬の句は『死の底に髑髏の破片もなかりけり』を添えました。

河内長野市に滝畑ダムがあります。農業の灌漑目的と上水道目的のダムで、1967年に工事が着工されて1981年に完成しました。ダムの建設中で貯水をできていない頃に、廃墟となった村を通過したことがあります。現在はダム湖の底ですが、建設中は廃墟の村に行くことができました。父親が運転する自動車の助手席から眺めていると、廃墟の村から奇妙な雰囲気を感じられたので、強く記憶に残っています。

古くから日本では貯水目的でダムが作られました。最も古いのは大阪府狭山市にある狭山池ダムで約7世紀頃に木材を利用して造られました。

現代のようなコンクリート式のダムは、明治33年に造られた兵庫県の布引ダムが最初でした。その後、発電や農業用水、飲料水などの目的で次々とダムが作られました。明治から昭和にかけて大型建設機械の無い時代は、ダム建設の殆どを人力に頼っていました。ダム建設場所は山間地が多いので危険な作業となります。人力が主体ゆえに事故死の犠牲者も避けられないのが実態でした。それでも貴重な現金収入ですから、地方からも多くの男

性がダム建設に従事していました。

鶴彬全集にはダム建設の犠牲者について詠んだような句は見当たりませんでした。でも、それを彷彿させる句がありましたので、それを添えました。

④ 不定期記事第4回

不定期記事の4回目は、2021年4月の第187号の旧川崎貯蓄銀行が戦前まで営業していたビルで、鶴彬の句は『階段からもんどり打って下へ落ち』を添えました。

大阪市福島区にアールヌーボー調のデザインのビルがあります。そのビルには現在アパレル会社が入居して営業していますが、戦前までは旧川崎貯蓄銀行が営業していました。

矢部又吉氏が設計したビルで、昭和9年に完成しました。矢部氏は明治末期から昭和初期にかけて活躍した建築家で、日本の近代建築の発展に大きく貢献しました。

明治になると次々に銀行が設立されました。大手銀行だけでなく中小の銀行も設立されました。その中でも貯蓄銀行は、江戸時代の金融システムを参考にして設立された銀行で、地方都市の中小企業などを支えています。地方都市に根付いた銀行でした。そうした時代の波に乗ることができた民衆は裕福になりました。

地方でも都市は発展しましたが、農村地域は取り残されたので、貧富の格差が大きくな

る一方でした。その時代、農村地域の民衆の生活上は政府から見向きもされませんでした。経済不況や飢饉が起きると、生活力の低い家庭から転落して貧しくなっていくます。そのことを象徴するかのような類似の句がありましたので、それを添えました。

簡単に4回の不定期記事を紹介しましたが、鶴彬が生きた時代は、現代とは違って情報を得る手段が限られていました。新聞や瓦版、同人誌、口コミしかありませんでした。そうしたなかでも多様な視点で川柳を詠んでいたことには、本当に驚かされました。そういうことで、『鶴彬と大阪を歩けば』の詠み替え企画に取り組むことにしました。

[10] 『鶴彬と大阪を歩けば』の
タイトル決め

まずは、取り組む前に詠み替え企画のタイトルを決めることにしましたが、それほど悩まずに決まりました。不定期記事の現地取材をしているうちに次第に鶴彬とともに歩いているかのような存在感を感じるようになっていきました。その感覚をタイトルにしようかと決めて『鶴彬と大阪を歩けば』にしました。タイトルが決まると、次にはどのような鶴彬と出会うのかと楽しみでわくわくしてきました。シリーズな内容の記事も少なくはないだろうと予想していましたが、鶴彬と交流できると

いう楽しみもありました。

【11】『鶴彬と大阪を歩けば』の

記事の紹介

① 鶴彬と大阪を歩けば第1回

そこで特に印象に残った記事をいくつか紹介したいと思います。

第1回は2022年7月の第202号で、大阪大空襲についての記事で、鶴彬の句は『正直に働く蟻を食うけもの』を添えました。

大阪大空襲は1945年3月～8月にかけて8回ありました。この取材時はロシアとウクライナの戦争が起きていた時期だったので、これを初回にしました。鶴彬は1938年に死去したので、アメリカ軍による日本の都市の空襲を経験していません。ですから、それについての川柳ありません。僕自身も大阪大空襲が起きたことだけは知っていましたが、その中身は全く知りませんでした。

大阪城公園のピース大阪に詳しい資料が展示されています。

大阪の空襲は、100機以上のB29の編隊による大空襲が8回ありました。小さい空襲も含めると1944年以降で合計50回以上もあったそうです。焼夷弾だけでなく1トン爆弾や通常爆弾など壮大な量の爆弾が投下されました。機銃で民衆を打ち狙ったこともあり。資料館には、特に規模も被害も大き

かった大空襲の資料が展示されています。

大空襲後の廃墟が広がる大阪の惨状の白黒パノラマ写真を目の前にすると、本当に言葉を失うほどに衝撃を受けました。その元凶となった焼夷弾の模型も展示されています。犠牲者は8回の大空襲で約1万5千人だと言われています。

ピース大阪で資料を見ると、大空襲の惨状を想像せずにはいられませんでした。鶴彬は全く知らずに命を落としましたが、それを想像させるような句を見つけた時は背筋が震えました。まるで焼夷弾で犠牲になる民衆の姿を活写しているかのように感じた句だったので、それを添えました。

② 鶴彬と大阪を歩けば第5回

どの記事も印象深いのですが、次に紹介したいのは第5回で、2022年11月の第206号に掲載されました。大阪拘留所についての記事で、川柳ではなく鶴彬が金沢第七連隊を除隊後の1934年昭和9年1月に発表した詩の一節の『ヘーゲルの弁証法を逆さにして網窓の春！秋！』を添えました。

鶴彬は、大阪衛戍監獄で刑期満了した後の1933年昭和8年に金沢第七連隊を除隊したので、昭和9年に活動を再開します。再開後に初めて発表したのが詩なので、その一説を添えました。

この詩は『弾のこめところまで…』で始まる

ので、獄中にいた頃の鶴彬自身の心境を詠んだ詩であるのは間違いないと思います。

取調べや裁判の心境と獄中生活の心境は別物です。取調べや裁判で無実を訴えていても、獄中の規則には従う必要があります。その点について言えば、鶴彬の獄中時代も僕の獄中時代もそんなに変わりません。そのことを鶴彬は『ヘーゲルの弁証法を逆さにして』と自分の置かれた状況を諧謔で表現したのだろうと思います。僕の獄中の代表句は『無実でも拒めぬ獄の飴と鞭』です。偶然のことですが、鶴彬と同じ視点で詠んだものでした。

僕は再審請求で無実を訴えて闘っていましたが、大分刑務所では無実で無期懲役の受刑をしないといけませんでした。無実なのですが、刑務所が定める反省や更生のための矯正教育を受ける必要があります。真正面から受け入ると心が引裂かれるようなストレスを抱えることになり、最悪の場合は心が病んでしまします。そうならないために心の持ち所が鍵となります。そのような滑稽な身の上ですから、僕は、それを川柳に詠みました。

ヘーゲル弁証法は難しい哲学なので説明は省きます。そこで鶴彬の伝えたかったことは何かです。それは——第七連隊赤化事件には無関係なので軍法廷では無実を訴えた——その一方で、無実であっても大阪衛戍監獄の規則には従うべきである——その矛盾を心の持ち方で引き受けたが、それは実に滑稽なことである——ということだと思います。その

滑稽さを伝えたくて、『ヘーゲルの弁証法を逆さま』にするという諧謔表現にしたと思います。ですから、冤罪で大阪衛戍監獄で受刑していても、怒りや恨みなどを持たず、愚痴も持つことはなかった、ということも理解できます。

僕は、大阪拘置所時代に『道元禅師物語』を読んで、獄中で冤罪の闘いをするための心構えを整えることができましたが、鶴彬の心境と重なるものがあります。

当時の僕は、その心構えで本当に良いのか確認したかったので、西村恵心禅師に手紙を出したことがあります。当時は花園大学の学長で、読売新聞に紹介の記事が載っていました。それを見て手紙を出しました。住所も郵便番号も分かりません。すぐに獄中で調べることもできません。そこで封筒の宛名には、

『花園大学学長殿 西村恵心禅師様』とだけ書いて発信しました。それでも無事に届いて、西村恵心禅師から返信がありました。禅師の手紙には『その悟りの心構えで闘ってください』という言葉がありました。その禅師の言葉で顔を上げることができました。

③ 鶴彬と大阪を歩けば第8回

最後に第8回を紹介します。2023年2月の第209号では、かつて煉瓦産業の町だった岸和田市について取り上げました。鶴彬の句は『資本家の工場にニヒリストの煙

突』を添えました。

岸和田市と言えば“だんじり祭り”で有名で、泉州と言えば紡績業で名を馳せた地域ですし、現在は泉州タオルを名産にしています。

実は岸和田市には、かつて煉瓦産業が盛んだった街という歴史があります。現在では、煉瓦産業の街だった面影が殆ど見られないので、煉瓦産業が隆盛を極めた歴史があると言ってもピンと来ないのが実情です。

昭和30年代までは岸和田市の沿岸地域には煉瓦工場が幾つか並んでいて、ホフマン窯の煙突が立っていました。最盛期は大正時代で、ホフマン窯の煙突が伸びる煉瓦工場が幾つも並んでいました。巨大煙突が並ぶ光景は、当時は近代建築の最先端資材の煉瓦を大量に供給しているという自負が市民にはありました。

岸和田市の山間地では良質の粘土が採れます。ですから、煉瓦製造に絶好の地でした。

軽便鉄道で山間地から粘土や土を煉瓦工場に搬入していました。24時間連続操業だったので、次々と煉瓦が出荷されます。その煉瓦は船や鉄道で運搬されました。岸和田煉瓦は特に強度に優れていたもので、西日本各地に出荷されていました。

ただ、煉瓦を焼いて製造するには大量の石炭を消費します。必然的に煤煙も大量に噴出していました。現代は環境を守る方法で製造されていますが、それは技術革新が進んだ戦後になってからのことです。

また、船に煉瓦を積み下ろしするとなると、当時は主に手作業でした。過酷で危険な作業なので労働環境は悪かったですが、貴重な現金収入なので多くの労働者が集まりました。

『鶴彬と大阪を歩けば』の企画で選んだ鶴彬の詠み替えの句のなかで、個人的に最も秀逸だと思ったのは、この『資本家の工場にニヒリストの煙突』です。当時の街には煙突の立つ工場がたくさんありました。その煙突から黒煙が出てくるのを見て、労働者の心の煙突から出されるモノを川柳で表現したものです。まるで現代の一般派遣労働者のことを詠んでいるかのように僕は思いました。『ニヒリストの煙突』の表現と『資本家』との対比に諧謔が効いていて、秀逸だと思います。ニヒリストの煙突という表現は、一目見ただけでは簡単な言葉選びのように思えますが、実際はなかなか思いつかないことだと思います。

④ 鶴彬と大阪を歩けば第9回

先ほど、アスベストの石綿産業について再び掲載したと説明しましたが、それは2023年3月の第210号の第9回でした。説明不足があったので加筆修正して、鶴彬の句は『生と死の境界線にたじろいで』を添えました。鶴彬は石綿産業の健康被害については全く知らないままでしたが、まるでそれを知っているかのような句を詠んでいたで、これを添えました。

[12] 鶴彬と大阪を歩けば感想編

最後の第12回は2023年6月の第213号ですが、これは感想編になります。この企画を取り組んだことで、鶴彬の川柳には高い普遍性があると実感しました。それを個人的な感想として記事にしました。

まず、なぜ高い普遍性があるのかと考えてみました。第一に、鶴彬は「全ての庶民の苦しみを救いたい」という思いで川柳を詠んでいたからではないかと思われます。第二に、鶴彬全集を鑑賞していて気づいたことです。が、人の名前を取り込んだ川柳がなかったことです。個人の問題ではなく、社会の問題と考えていたからだと思われます。第三に、反戦や平和という言葉を使わないで、人の営みの場面を詠むことで、それらを表現していることです。

当時の社会は貧富の差が大きくて地方の農村は特に貧しかったと言われています。労働環境も悪くて、健康を害する労働者も少なくはありませんでした。重労働の割には低賃金なのが普通でした。そうして庶民が苦しむ姿を鶴彬は目の当たりにしました。そのように庶民が苦しむような社会の構造とは何なのか、という社会の問題を意識して、鶴彬は川柳を詠みました。

共産主義の運動家と交流をしていたのは事実ですが、鶴彬自身は共産党に入ったことは

ありません。庶民の苦しみを救うのにマルクスの資本論が役に立つのではないかと考えて交流していたので、プロレタリアートに関心に向けた川柳も詠んでいました。でもそれは、庶民の苦しみを救いたいということが大前提になっていました。共産党員ではなかったのも、そもそも治安維持法の対象となるような立場ではありませんでしたので、鶴彬は冤罪だと個人的には思っています。

鶴彬が1928年昭和3年に詠んだ川柳を紹介します。

『資本論やけど飢えたる群れの声』

この川柳から、鶴彬は、庶民の苦しみを救うのに役に立つ道具なのかどうかという視点でマルクスの資本論を受け止めていたということが、読み取れます。

このように首尾一貫して庶民の苦しみを救いたいという視点で川柳を詠んでいたからこそ、高い普遍性を持つことになったのではないかと、と思われます。

普遍性と言えば、僕にも普遍性に関わる出来事がありました。

大分刑務所から釈放されて実家に帰宅した後、数日してから、地元の共産党の市議会議員のWさんに挨拶とお礼を伝えに行きました。冤罪の闘いでは共産党にも支援してもらっていたので、そのお礼で訪問をしまし

た。色々話した後、いずれは帰化して日本国籍を取る予定にしているとWさんに話しました。そのWさんから、日本国籍を取得したら共産党に入りませんか、と誘われました。けれども、僕は、それを丁重に断りました。

その理由は、冤罪事件を防止したいという活動は普遍的なことなので、どこかの政党に入ることはない、とWさんに説明をしました。冤罪事件を支援している政党は日本では共産党だけです。それについては評価しています。だとしても、冤罪当事者が活動していくには普遍的な立場であることが大事だと考えていたので、Wさんの誘いを断りました。

鶴彬が共産党に入らなかった理由は、分かりません。ただ、『庶民の苦しみを救いたい』を第一に考えていたのは確かですし、そのためには普遍的な立場であったほうが良いと考えて共産党には入らなかった、という可能性は、十分にあると思っています。

[13] 江戸時代に川柳が誕生

川柳という文芸は、人の営みの場面を詠んで諧謔を愉しむ文芸です。俳句の場合は、人の営みを季語の営みの場面に託して詠む文芸ですので、そこが川柳と違うところです。

現在、NHKの大河ドラマ「べらぼう」が放送されていますが、1780年〜1800



年前後の葛谷重三郎の物語です。

実は、川柳が誕生したのは1760年頃のことです。柄井川柳が始まりです。本名は柄井勇之助です。当初は無名庵川柳という号でしたが、後に柄井川柳という号になります。1765年に『俳風柳多留』（はいふうやなぎだる）という川柳句集を初めて出版したことで、川柳が世に登場しました。

江戸時代は、江戸幕府の批判はご法度でした。ですから、川柳でも、江戸幕府に関する直接的な言葉や名前を詠み込むことができません。

せんでした。そこを工夫して川柳で表現する、という特徴が発展しました。そうして諧謔表現でユニークに批判したりしていました。もちろん、庶民の生活を詠んだ川柳もたくさん詠まれました。

大河ドラマの「べらぼう」は川柳誕生から約20年後の江戸の社会を舞台にしています。

そこに太田南畝という狂歌師が登場します。俳優の桐谷健太さんが演じています。この時代の狂歌は、五七五七七の和歌の形式で詠まれています。「べらぼう」で太田南畝の紹介された狂歌は、とてもユニークでしたが、この表現方法は川柳の諧謔と同じものです。

この当時、川柳も民衆に普及していました。川柳よりも狂歌のほうが隆盛をしているようでした。葛谷が発行した狂歌の黄表紙も好評だったようです。歴史的には、狂歌が隆盛した後に川柳が隆盛することになります。

【14】おわりに

鶴彬は、川柳だけでなく、詩や自由律の句などを作っています。同じ時代に、自由律俳句で種田山頭火が名を馳せていた。その影響を受けたのでしょうか、自由律の句もたくさん詠んでいます。鶴彬は五七五の川柳については、江戸の川柳文芸の伝統を受け継いだ上で、普遍的な川柳を詠むことで、川柳の現代化に大きく貢献したと評価できるかと思っています。

僕は個人的には鶴彬は川柳の天才だと評価しています。

『鶴彬と大阪を歩けば』の企画を終えて、ふと一つの問いが浮かんできました。鶴彬の川柳の原点とは何なのか、という問いです。それを知るためには鶴彬の生家に行く必要があります。ありましたので、昨年10月に訪問しました。

その原点とは、日本海を眺めながら生家で育った体験と母親と生き別れた体験にあると感じました。母親が再婚して自分を置いて東京に去ってゆきましたが、それでも母を恨むわけではなかったようです。それよりも、そのような状況を生み出した社会とは何なのか、という社会の問題に目を向けたのではないかと、と生家を訪問してみて実感しました。

鶴彬の川柳は常に語り掛けてきます。『庶民の苦しみを救わずして、どうするのか』と。少しでも鶴彬の川柳の力を受け継いでいくように、同じ冤罪体験者として、これからも川柳を詠んでいきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

下のQRコードを読み取っていただければ、当日の冬のト氏の講演をYouTubeで観ることができます。



「鶴彬・交流の広場」

■ 今年の高松歴史街道フェスティバル（9月14日15日）に参加された方々からいただいたお手紙を紹介いたします。

第27回鶴彬をたたえる集いに参加して

乱 鬼龍

（東京鶴彬顕彰会）

（レイバーネット川柳班）

「戦後80年」「治安維持法100年」という



卯辰山の句碑の前で撮影。左側が乱鬼龍さん

時代の中、今年は「川柳人100年」「鶴彬川柳大賞30周年」ということでもあり、私たちも「抵抗川柳句集」も発行する中で、8月2日「川柳人100年」で岩手県へ、そして、9月14日（日）15日（祝）の石川県へと、友人も誘って参加しました。

多くの人びとが、今、感じているように、今、時代は、かなり、キナ臭く、危険な方向へと向かっていると思います。

戦前、治安維持法という悪法によって、鶴彬も29歳という若さで獄死させられたというような時代を、二度と繰り返してはならないという思いで、「集い」に参加させて頂きました。

お集まりの皆さまが、長年にわたって、この集まりを継続されてきたことに、心から敬意と連帯の意を表したいと思います。

そして、あらためて、鶴彬が、今、生きていたとしたら、どのような川柳をつくり、また、行動をするだろうかと思いました。

東京での鶴彬顕彰会の活動は、中々、思うように進んでおりませんが、新宿での「平和展」での映画「鶴彬」の上映とパネル展をはじめコツコツと活動を続け、毎月定例会も続けています。この「集い」に参加させて頂いて、東京でも、新たな歩みを目指して進み

たいと思っております。

お世話になりました皆さま、有難うございました。

七年ぶりの高松訪問

こはりつよし

（あかつき川柳会）

今回、高松歴史街道フェスティバルに参加して鶴彬を顕彰する会の皆さんや東京の乱鬼龍さんと色々お話ができて楽しい時間を過ごすことができました。

七年前の二〇一八年六月三日にネットの情報で元に鶴彬資料館を訪れました。たかまつまちかど交流館の方が顕彰する会に連絡を取ってくれました。突然の訪問にもかかわらず寺内徹乗さんが来られて資料館の説明をしていただきました。さらに生家や浄専寺・高松歴史公園、海岸も案内していただきました。顕彰する会へその場で入会しました。ま



こはりつよしさん（歓迎会の全体写真より）

た「鶴彬」こころの軌跡」DVDと「絵本鶴彬の生涯」を手に入れることができました。

この訪問については生駒番傘川柳会「川柳いこま」同年七月号に「暴風と海との恋をみましたか」とのコラムで紹介しました。

その後、寺内さんには「鶴彬通信はばたき」三八号（二〇二一年）「森鶏牛子の素顔」で紹介された資料等も提供しました。

今回、資料館で見たり顕彰会の皆さんとお話して「人民川柳」と石原青竜刀について改めて興味を持ちました。資料館にあった「人民川柳」も読んでみたいです。国会図書館にアメリカの検閲文書として創刊号から三号までのマイクロフィルムがありコピーを手に入れています。検閲で実際どのように変わって発行されたのか見てみたいです。「人民川柳」は東京の日本近代文学館にも何号かあり一部コピーしました。

石原青竜刀については乱鬼龍さんが実際に交流があったらいいので、次回お会いしたら詳しくお聞きしたいと思っています。

今回の訪問で新たな繋がりができました。フェスティバルでお忙しい中、このような機会を設けていただき大変ありがとうございます。

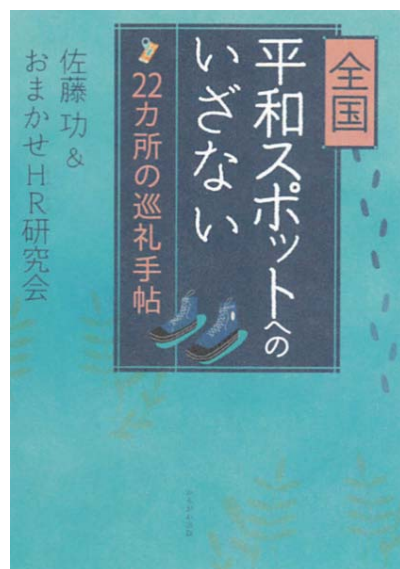
■10月9日には長野県から来られた国賠同盟の方々3人（林茂樹さん、竹内幸子さん、礒野紀子さん）が、鶴彬資料室に来られました。その後、浄専寺の境内にある句碑、鶴彬の生家の庭にある句碑や高松歴史公園の句碑を見に行きました。

資料室では、「鶴彬川柳大賞やかほく市民川柳祭などの活動が続けるのは大変なことだと思いますが、本当に有意義なことです。これからも頑張ってください」と励ましていただきました。



長野県から来られた国賠同盟の方々（高松歴史公園にて撮影）

■10月3日には大阪から佐藤功さんという方が鶴彬資料室を尋ねて下さいました。その日はたまたま顕彰会の幹事会があった日で、幹事会が終わったちようどそのタイミングで、資料室に佐藤さんは来られました。なぜこの資料室のことをご存知なのかをお尋ねしました。すると手にしておられた本を見せていただきました。実はその本の中に、鶴彬のことや、その故郷である高松のことが紹介してありました。その佐藤さんから、お手紙をいただきましたので紹介いたします。



故郷を訪ねて

このたび、鶴彬が幼少を過ごした、石川県かほく市（旧河北郡高松町）を訪ねる機会を得た。金沢から車で海の方に行くと、のと里山海道という走りやすい自動車道に合流する。約半時間ほど走って高松ICで降りてすぐ、鄙びた海沿いの集落が彼の故郷だ。その集落の北の端に

その本の中の一節

佐藤さんが手にしておられた本

『全国平和スポットへのいざない』
鶴彬ルポを訪ねて

佐藤 功

戦後80年、節目のこの夏、標記書を発刊しました大阪の佐藤と申します。

「ああ、ここへ行ったら、やっぱり平和って大事だよなあとしみじみ感じさせられる」



左から順番に、平野道雄さん、本を手にしておられるのが佐藤功さん、喜多義教さん、遠田勝良さん、右端が板坂洋介さん

私たちの言う「平和スポット」とはそんなところ。8名の仲間たちと、北は北海道から南は沖縄までを実際に訪れ、22カ所をルポしました。

そんななか、メンバーの1人、Nさんが「ぜひここを書きたい!」と強く主張したが、鶴彬句碑。最初はだれも「つるあきら」とは読めません。「カクリンさんってだれ?」

どこの国の人?」と失礼を連発するメンバーたちに、Nさんは大阪城公園に句碑があること、治安維持法下にもかかわらず、匕首(あいくち)のように鋭利な川柳で権力を批判し続けた人であること、そしてその人の生家が石川県かほく市高松にあることなどを教えてくれました。

先日、別件で中能登に行く機会を得た私は、「さすがに故郷だけあって、一度に三基の碑に出合うことができる」とのNさんルポにひかれ、JR高松駅で途中下車。生家喜多家や浄専寺を訪問し、句碑を見学しました。Nさんが訪れた際は「残念ながら休館」だった資料室は、たまたま「鶴彬を顕彰する会」の会議中で、

「どこから来られた? ええー、大阪からわざわざ? なんでもまた……?」

という流れで、いま、この原稿を書かせていただいている次第です。

私たちの書を手に、鶴彬の碑や生家、そして資料館を訪れる方がおられれば幸いです。

詳細な解説のほか、鉄道旅の私を見かね歴史公園までご案内くださった高松の皆さまへの感謝のしるしに、資料館に本書を1冊置いてきました。きな臭さ漂う令和のいま、全国各地には決してメジャーではないかもしれないが、しつかり平和希求の声をあげ続けておられる仲間がたくさんおられる。ぜひ、ご覧ください。

戦跡、史跡だけでなく、平和だからこそ味わえるグルメや温泉情報も必須としているのも本書の大きな特徴です。温泉につかり「ああ、いい気持ちやあー」と思わず口にしたとき、人は「この安寧をずっとずっと守り続けなきゃあ」と実感します。鶴彬が「匕首のような鋭利な川柳」で戦ったのはまったく異なり、私たちの書は軟弱な仕様です。が、たとえ時代や表現形態は違えども、「だれもが言いたいことを自由に口にできる世の中」を良しとし発信する方向は同じだと自負しています。

このご縁、これからもどうぞよろしく願います。

(さとういさお・大阪府立高校元教諭、
大阪大学元教授)



渡辺 寛さんを 追悼するコーナー

■渡辺寛さん、今まで本当に有り難う

鶴彬を顕彰する会事務局長 平野 喜之



高松歴史公園の句碑の前で、鶴彬資料室を見学に来られた方々に説明をする渡辺寛さん（今年6月4日）

鶴彬を顕彰する会の事務局をしていた渡辺寛さんが、今年10月19日に命終されました。渡辺さんは長い間、鶴彬を顕彰する活動が続けられ、当会の機関誌である「はばたき」の編集作業や発送作業をお手伝いいただき、鶴彬川柳大賞の栞作りもしてくださいました。また、たかまつまちかど交流館の3Fにある鶴彬資料室や鶴彬の句碑を案内し

てほしいという方がおられたら、必ずと言っていいほど、その方を卯辰山の句碑に案内されました。本当にいろいろお世話様でした。

■渡辺寛さんを悼む

当会会長 金田 平夫

寛さんとは顕彰する会で知り合いになった他、意外にも私の主催する地引網グループにも興味をもって頂き、昨年春より毎回参加していました。意外と言うのは、彼は文系の人でスポーツ系が苦手かなと思っていたからです。多芸多趣味の人でした。

早朝より金沢から高松の海岸までこられました。何時も奥さんや沢山の友人を車に乗せてこられました。友達が多く優しく親切で、とてもアクティブな人と感じました。漁では、楽しむ姿を動画に撮り、皆に提供する隣人愛の強い人でした。

「非常に優しく親切で、気遣いが深く隣人愛が強い」誰からも好かれた寛さんの突然の訃報が入りましたが、あれだけ元気であったので、とても信じられませんでした。亡くなる当日まで元気に活躍しておられたとの事です。

実に残念です。きっと天国が極楽に間違いなく行かれています。ご冥福をお祈りします。

■渡辺寛氏の訃報に思う

当会副会長 板坂 洋介

当会の幹事（事務局員）渡辺寛さんの突然の訃報を知らせる平野事務局長からの電話に驚いた。

享年78歳だったとのこと。彼との出会いは、15年程前に金沢市内を流れ兼六園に流れ込む犀川上流にある辰巳用水東岩取水地点にダム本体が建設される計画に反対する、市民運動の中心的人物の一人として知り合った。

この運動は自然環境と辰巳用水の文化遺産の保護に取り組み、辰巳ダム建設反対の運動でした。2008年5月事業認定処分取り消しを求めて提訴。2017年2月最高裁の判決まで約9年を要した闘いでした。結果は敗訴だった。

しかし、全国でも例のない穴空きダム（治水専用）に変更され、ダム位置も辰巳用水東岩取水口を避けて500m上流へ移動し建設された。平時は水を貯めないで本流の水の汚濁を防ぎ、文化遺産の守り、ひいては犀川の保全の一助となった。この闘いの中で彼の果たした核心的役割は、情報公開条例を駆使し徹底的に当局の情報を公開させて市民に知らせたことでした。ものごとの本質を見抜き根拠を正す彼の一貫した姿勢は、鶴彬の生き

ざまと似ており、当会の通信（はばたき）の編集にも表れていた。冥福を祈る。

■寛さんを偲んで

当会事務局 平野 道雄

合掌。十月十八日は浄専寺の報恩講に寛さんと奥さんの美智子さんが参加されていた。法話が終わって帰られる時に、「今晚のコンサートは、仕事があるのでダメだわ」と言われ、私は「それは残念やね」と。それが寛さんとの最後に交わした言葉となった。そんな別れ方をしなければならぬことが起るので、今、生きている世界を仏教では娑婆と言ったのだろう。

お二人で浄専寺の毎月の聞法の集い（「生きることを学ぶ会」「大地の会」）に時々参加された。時には、同じアパートの仲間を誘ってこられた。

寛さんは、現代社会の状況から問いかけられている様々な問題に立ち向かう人だった。社会の闇に無関心ではおれなかったのだろう。

また、人を隔てず「共に」を大事にし、弱者と痛みを共有して歩もうとされていたように思う。

聞法の座に身を置こうとされたのは、人間の闇に学ぼうとされたのでは…。闇を作つて

いる私たちのあり方を学ぼうとされていたのかも知れない。虚言の多い世の中だからこそ、真実の言葉に出遇いたかったのだろうか…。

これから、そんなことを語り合えるご縁があると思つていたのだが…。

本堂にて預かったお骨の前に立つて思う。寛さんの生き方をまねることはできないが、願つていた世界を学ばせてもらわねばと…。

渡辺寛さんを供養すると言つても、彼の願いに遇つていくことではと…。再拝。

■渡辺さん、ありがとうございました。

当会事務局 小山 広助

会の担当が財政係で、渡辺さんには大変助けて頂きました。どの事業も予算内であるのに苦労しているが、「市民川柳祭」では表彰状を今までは秀句、佳作で二十七枚でしたが渡辺さんが手作りで奇抜な表彰状をカラーにして、入選者を含め百枚ほど自分で印刷、受賞した小中学生はニッコリでした。

「鶴彬川柳大賞」の投句者に贈る「入選句の栞」についても、投句者が年々減少し印刷料、郵送料などの値上がりで苦慮していました。第二十六回から全員の提案で選者は広く鶴彬顕彰活動にご協力いただいている方々に決め編集や発送作業は全員で、渡辺さんに印

刷をお願いして来ました。渡辺さんのお陰で印刷料の削減、送付は郵送から民間企業に委託するまでお世話をして頂きました。

本年度三十回「鶴彬川柳大賞入選句の栞」印刷に入る時に急逝されて・・渡辺さんにはいつも重い仕事や迷惑をおかけしていたことに気づきました、心からお詫びいたします。またどこかで会える様な別れでした。ご冥福をお祈りいたします。

■本当にありがとうございました。

当会事務局 喜多 義教

二十日に電話で渡辺様が亡くなられたお知らせを頂き、まさかと驚き聞き直しました、本当に残念な思いです。渡辺様は川柳歴50年の経歴を持ち、高松川柳会の会員で句会には毎回金沢からご夫婦で参加して頂いております。大変文学に強く、分野を問わずいろんな本読みしているようでした。質問にいつもニコニコと答えてくれました。それにPCの腕も抜けていて会員の皆様に教えることもしばしば、昨年には川柳会のサツマイモ掘りを一緒にした時も、近所にすそ分けするのが一番の楽しみだと言いながら汗を流しニコニコとイモ掘りを…。晴耕雨読を見たと思います。

色々教えて頂き本当にありがとうございました。

した。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

■追悼

心が寒くなったら彼の笑顔を思い出そう

当会事務局 遠田 勝良

渡辺さんの訃報に接し今も信じられないでいる。と言うのも前日十八日の夕方、高松まちかど交流館で会っていたからです。

渡辺さん夫妻は浄専寺さんの報恩講帰りでした。昼食抜きだったのか「腹減ったなあ」とお二人味噌ラーメンを注文、私はコーヒを飲みました。会話は鶴彬川柳大賞三〇周年の栞の出来具合いと「はばたき」五〇号に記載予定の彼の記事についてでした。ほぼ完成に近い口ぶりでした。

話題はこの日大谷翔平がアメリカのワールドシリーズ第4戦で歴史的偉業を達成したとのビッグニュースに当然及びました。

しかし、それが一度に吹き飛ぶ無常の風に見舞われるのを誰が予想出来たでしょう。寛さん、もう一度眼を醒ましてください。やらねばならない事がいっぱい待っています。



献句

大谷のドラマ打ち消す無常の詠 亀公子

■渡辺さんの回想

当会幹事 井口 武久

彼と初めて出会ったのは、平成十年頃に私が駅西保健所にボイラーマンとして勤務していた頃である。

その頃から、自然再生環境保全活動が盛んになり、私もその一員となり、発会式に渡辺君と共に参加したことが、最初の出会いとなった。

木津の民話サークルにアトラクション参加を呼びかけ出演してもらい、以来サークルの老人達が河北潟クリーン作戦のメンバーになり今日に至っている。

彼が老人たちの民謡を聞きながら手拍子を取り会場に居たスラリとした長身の女性に、あの人はどんな人なんだろうと、私に聞いてきたことが印象に残っている。後から判ったことはスラリ美人は高松の方で県の婦人会長だった。すぐ彼に連絡したことが昨日のことのようである。

会議のあとに話す度に印刷業をしていることや辰巳ダム建設反対運動の先頭に立って、がんばっていることなどを知り、奥さんが私

の勤務が勝山電話局で奥様も勝山で仕事をしていたこと、高校も勝山高校であったことから、何となく親近感を感じたこと、後年七塚川柳会で勝山紀行をした時に、宿の手配や観光の世話をして頂いたこと 北陸で冬の川柳まつりを体験した皆は、又とない思い出となった。今は激動の時代、君を失った痛手は大きい。かけがえのない同志の死を悼みたい。

■哀悼 渡辺寛様

東京鶴彬顕彰会

レイバーネット川柳班 乱 鬼龍

渡辺寛さん（和川柳社代表）が亡くなられたと伺って、本当に驚きました。

9月13、14、15と、鶴彬の集いのため、石川県に東京から2名で伺い、渡辺さんには、いつものことながら、大変お世話になりました。

私は、「川柳 和」とは、先代の岡田一杜さんの時代から数えると、もう50年以上の御縁をいただきました。

渡辺さんが、石川県の地で「川柳 和」を継続され、また「鶴彬を顕彰する会」の、力強いメンバーの一人として、ご尽力されてこられたことは、多くの人の知るところです。心よりの哀悼の意を表します。

会費・購読料納入のお願い

顕彰会 財政係 小山 広助

前号で財政の現状報告をしましたが、従来から会費・購読料の請求は納入した月から一年経過した翌月に、次年度の納入をお願いする文書を「はばたき」に折り込みしてきました。自主納入の呼びかけのため本人が前年の振り込み日を忘れがちとなり、納入お願いの文書が遅れると納入も遅れると指摘されました。現在の会計年度は一月一日～十二月三十一日で、「はばたき」は四月・八月・十一月末に発行していますが、昨年十一月末の発行予定が本年一月となり、会費・購読料の納入願いの折り込みが遅れました。

その事で昨年末までに振り込まれる会費・購読料が本年一月、二月の納入となり、昨年末決算が赤字繰り越しとなりました。

本年度は十一月末発行予定の「はばたき」を十月末に発行し「会費・購読料納入のお願い」の文書の折り込みと、川柳大賞の「入選作品集」を同時に送付し経費の節約を計ります。

会員各位には、本年の一月から三月までに納入された方については、以上の事情をご理解いただき繰り上げ納入となりますが、十二月末までに納入をお願い申し上げます。

編集後記

鶴彬を顕彰する会事務局 平野 喜之

今年は、「鶴彬川柳大賞」応募30周年を記念して、本当にたくさんの皆さんの御協力によって平和と復興の祈りを込めて千羽鶴を作成し、高松歴史街道フェスティバルの会場に飾ることができました。

さらには、高松少年少女合唱団やはまなすコーラス、フォークグループの「でえげっさあ」のコンサートもありました。これらも全く新しい試みで、会場の皆さんから「とてもよかった。また聴きたい」という声もいただきました。

あかつき川柳会の冬のトさんの講演も全く新しい視点からのお話でしたので、今回の「はばたき」には全文掲載しました。

今年の鶴彬川柳大賞は中川晴海さんの

この先に徴兵制が立っている

でした。非常に危うい政局になっています。そういう今こそ、鶴彬と共に歩みましょう。

訂正とお詫び

はばたき49号の鶴彬・交流の広場(21頁)の写真についてのコメントで間違いがあります。左側の上から3枚目の写真(高松歴史公園の鶴彬の句碑の前)で右から3人目を水口裕子さんとコメントしましたが、その方は水口裕子さんではありませんでした。水口裕子さんは右側の上から2枚目の写真(卯辰山の鶴彬顕彰句碑の前)の右端の方でした。また、一番下の段の2枚の写真の日付けが間違っていました。2枚とも6月17日になっていますが、2枚とも6月4日です。

鶴彬を顕彰する会



問い合わせ先



「はばたき」
ダウンロード



鶴彬という人



■発行 鶴彬を顕彰する会

■事務局 〒929-1215

石川県かほく市高松ツ66 浄専寺 (平野喜之 気付)

TEL・FAX 076-281-0546

携帯TEL 090-8209-3679

■E-mail: yoshiyuki.h.1192@gmail.com

■ホームページ <http://tsuruakira.jp/>

◆会員募集◆(随時受付)

*年会費3,000円(団体3,000円)

3,000円には「鶴彬通信 はばたき」購読料含む

*「はばたき」購読のみの場合は2,000円/年

郵便振替口座 00740-5-75480

加入者名 「鶴彬を顕彰する会」